

5. 家のでき上るのが楽しみです

豊丘村豊丘南小学校五年 Y・K

私の家はいかいたく地で、駅から六キロばかりの山の中でした。六月二十七日は思い出すのもおそろしい日であります。

その日雨は朝からジョロであけるようないきおいと、音を立ててふつていた。家の近くの山がくずれ始めた。そのときは、昼食をたべおわったころだった。水の少ない小さな川であったのに、大きな川になってどうどうと流れ、石も流れるのか、ごんごんと音も聞こえた。大きな音はかみなりか、山くずれかと思っていると川の音がしなくなる。すると滝の音を聞くような、どうつと言う音とともに川はまるでどろと水と木と土とのかたまりになって流れる。私の家は高い所なのでみえる。まるでうどん粉に、はしをこね合せて流したように、木が上へ出たりしてすさまじかった。私はただただふるえて言うこともしらずに、雨にぬれるのもかまわず、ぼうつと見ていた。すると雨はしだいに大雨となり、家の中にもいるのもこわかった。山くずれ、そして川の音をおそろおそろ聞いていると、お父さんはかっぱすがたでもどつて来て、

「これだけふれば、どこへも出ることができない。」
と言った。道はくずれ、どこどこは田も流れるところだといっていた。じつとしていられない気持であった。

夕方四時ごろには私の家の前もくずれ、ほら田を全部なめる様にして下の方にとんでいった。弟と私はお父さんたちの話を聞いて、どうなる事かと、家のすみに小さくなってふるえていた。その時ずしんと言うような音があったので、お父さんがとび出した。

「えらい事だ。家にはいられない。あぶない。」
とさわぐので出て見ると、東の方の家はどろにつつまれて、立ってもいない。私達は仕たくをして、おとなりにつれてもらった。道は川のように水が流れている。おとなりによくの事にたどりついた。家はどうなるのだろう。勉強用品だけ持った私は、弟と二人、家も見えないおとなりを考える事もできずに、火にあたっていた。

夕方お父さんたちもおとなりに来た。話を聞いたら又家のウラがぬけて来て全部つぶれたと、青い顔で涙をぼとぼと落しながら話してくれた。私達の茶碗も、はしも、米も、みそも、くつも、みんなどろになってどこかへ行っちゃったのだ。牛舎には乳牛が二頭いたが、ぶじで、お父さんが来ると大きな足をどろだらけにしてついて来たので、おとなりの牛舎と一緒につないだ。私がかわいがつてかかっていたうさぎと鳥はどうしたのと聞くと、暗くて山の下になつたか生きているかわからんと言っていた。

雨は夜になっても降り続けている。今日はどうにもならんからといっておとなりの牛舎の二階でねた。米も、みそもおぼさんがたいてくれてたべた。

二日たったら雨がやみ、私達も行ってみたが、家はなくなっていた。ただ屋根が山の上のこつていただけだった。私の家はほうぼうより大きかったにな

あと思ったら、涙が出た。ふくあとからあとから出て来た。お父さんもお母さんも来てくれた人もみんな、

「家だけでよかった。子供が山の下に入ったらそれこそ大きすぎだったに。」と口々に言っておるようだ。

みんなの家もすこしずつはこわれたと言っているが、道がなくて見に行けなかった。学校へも行けずこまっていた。しょう防の人達がなべやかまや米やもうふをしょって来てくれて、うれしくてうれしくてとび上がった。

そのうちにみんなの木をせおって来て、家のあった所でない方へ小さな家を建ててくれ、しばらくたって十月ごろだったと思うが、家ができた。

お父さんやお母さん達は毎日こんな所におることはいやだといって話していた。かいたくの人達十軒あったが、みんな他村の方へ来てしまった。今は畑だった所も田も、木を植えてしまった。

私と弟とお父さんお母さんは、村の中学へは行って、お父さんは学校の公仕さんで、お母さんはきゆう食婦さんで働いて、私達も本校へ行っている。学校が近いので、かいたく地にいた時よりらくだ。お父さんもお母さんもふとって来たようだ。お父さん、お母さん、がんばってやって下さい。

昨年十一月より始めて家を建ててくれている。小学校も近いし、おみせも近いし、道もよい所です。出来るのが、私の何よりのたのしみです。うれしいのです。そうすればおそろしかったり、かなしかったりした、かいたく地のさい害の事など考える事もいやになる。

私も早く大きくなって働いて、お父さんやお母さんをだいじにしてやりたい。苦ろうした事でしょう。

(三十八年)